

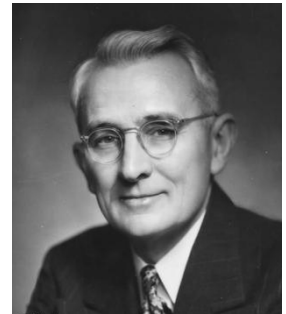


ちょっとそこまで ～お散歩日和 (名言編)～



成功者をつくり上げる条件は… デール・カーネギー

成功者をつくり上げる条件は数々ある。
健康な体、活力、耐久力、分別、熱中、そして、才能である。
しかし、ここに出さなかった条件のうち、
それがなければ他の条件一切を束にしても、
成功はおぼつかない条件が、ただ一つある。
それは、「勤勉」だ！ …… デール・カーネギー

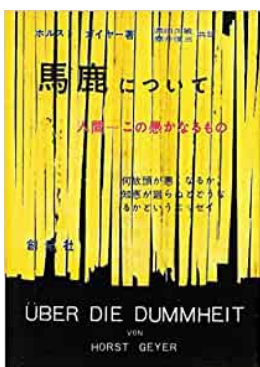


二宮尊徳を引き合いに出すまでもなく、勤勉は、昔から人間を成功に導くものとされてきました。ちょっと前の日本人は、こうした信念を高らかに謳い上げましたが、最近ではこんなことを言うと「古臭い！」と一蹴されそうです。これは、単に最近の日本人が怠け者になったからではありません。むしろ、ただ勤勉であるだけでは、どうにもならないことがあるのに気が付いたということだと思います。

しかし、カーネギーの指摘通り、勤勉が成功の十分条件ではないにしても必要条件であることは依然として変わりません。それどころか、そもそも何の努力もなしに手に入れた成果を「成功」と呼べるのかどうか甚だ疑問があります。ですから、成功者はことごとく勤勉であると言っても、それは言い過ぎではないように思います。

その一方、相も変わらず勤勉こそが重要であり全てに勝るとする人が大勢いるのも事実です。こういう人に、合理的な説明や綿密な計画、新たな発想を開示しても「理屈ばかり言うな」「口ではなく手を動かせ」という反論が返ってくるのがオチです。

ここで、ホルスト・ガイヤーというドイツの哲学者を紹介することで、勤勉に潜む危険性について触れたいと思います。



彼は「馬鹿について」という本を書いて、馬鹿についていろいろな角度から述べています。ここで先に謝っておきますが、この後しばらく「馬鹿馬鹿…」との不適切な表現を繰り返しますが、この著作にて使用されている文言なので、ご容赦ください。

さて、その中に、

- 物の世界にしばられている人
- 地べたにしがみつく人
- 軽妙さのない人
- 無能なために問題を持たない人……



要するに動物的なマジメさは馬鹿の証拠である。こういう連中は自分を大したものだとえらがりもったいぶる。

と定義している箇所が出てきます。先の「手を動かせ」式の論破しかできない自称勤勉家が、その典型と言えることになります。彼はさらに明確に述べています。

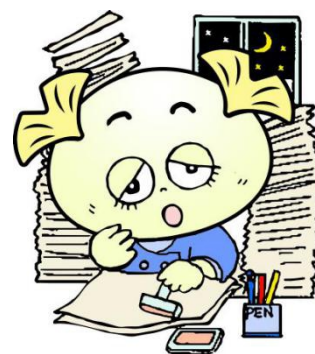
「勤勉な馬鹿ほど、はた迷惑なものはない。」

ここまで言い切るのは多くの敵を作ることになるだろうにと想像しますが、馬鹿が考える馬鹿なことを勤勉に行えば、結果はどんどん悪くなりますから、これは全くの真理と言って良いでしょう。

ただ、この言葉を聞いたとき、大抵の人は「あっ、自分のことだ。気を付けないと。」とは思わず、誰か他人を頭に思い浮かべるのではないのでしょうか。恐ろしいのは、馬鹿は、自分が馬鹿であることにはなかなか気付かないというところにあるのかもしれませんが。もちろん私も含めてのことです。

いかなる職業であろうと、その世界での生活を長年やっていると、この言葉が的を射ていることはよく分かります。例えば、

- ・午後5時を過ぎると頑張り始める人
- ・会議になると大量に資料を用意する人
- ・言語明瞭・意味不明の発言を繰り返す人
- ・意見がまとまりそうになると長引かせる人
- ・ものすごく立派なことを言う癖に実践が全く伴わない人…



要するに、こういう人に共通しているのは、その人物がいるだけで仕事がどっと増えることです。しかもほとんどが何の役にも立たない仕事ばかりで、そもそも何のための仕事なのかが分からない、それでどっとやる気が失せ、モチベーションが下がるというのが共通した特徴です。



三浦梅園は、江戸時代の思想家です。彼は終生、現在の太宰府市東半島にて医業の傍ら黙々と思考を続けた人です。その彼の言葉に、

「少ししか読まぬものは少し術学（げんがく）臭く、多く読むものはそれだけより術学臭くなる。両者ともども不愉快なものである。」

というのがあります。「術学」とは自分の知識をひけらかすことを言います。つまり、ちょっと本を読んだり、たまに勉強したりすると自分が偉くなったと錯覚し、本の知識を自分が作り出した理論の如く蕩々と話す手合いが多く不愉快なものだと言っているのです。ある意味、この名言コラムもそれに当たりそうで恐縮するところです。

少し脱線しますが、新渡戸稲造の「武士道」を改めて読んでいますと、その「武士道の源泉を探る」に、こんな文章を見付けました。こういう思いも寄らぬところで、思いも寄らぬ出会いをする瞬間は、結構、儲かった感に一人浸ることができる至福の時でもあります。

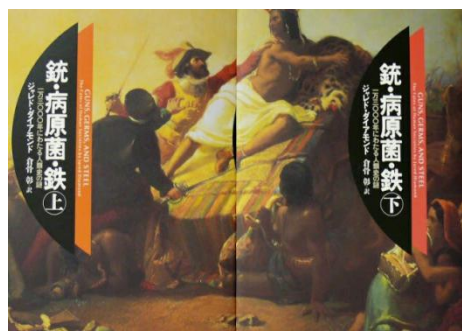


「三浦梅園は、学問を、それが実際に役立つまでには何度も煮なければならぬ、臭いの強い野菜にたとえている。また、彼は言う“少ししか読まぬ者は少し術学くさく、多く読む者はそれだけより術学くさくなる。両者ともども不愉快なものである”と。」

知識というものは、それが体に染み付き同化し、その人の性質として表面化して初めて真の知識になると述べているのです。ちょっと聞きかじったことを知ったかぶりして語る人を見ると、この言葉を思い出すと良いでしょう。

最後に、「銃・病原菌・鉄」（ジャレド・ダイヤモンド著）について触れたいと思います。

この本はご存知の通り、ピューリッツァー賞に輝いた世界的名著です。内容は、「なぜヨーロッパ人がニューギニア人を征服し、ニューギニア人がヨーロッパ人を征服することにならなかったのか？」との問いに答えるために書かれたもので、あらゆる角度からその論証を試みています。



そして、その結論は、「人々の置かれた環境の差異によるものであって、人々の生物学的な差異によるものではない。」というものです。つまり、勤勉と成功との因果関係を問う期待感に、非情なまでの「NO!」を突き付けているわけです。少々暗い気分になったところで、今回は強制終了とします。（終）